
西園寺家の秘密

Kn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西園寺家の秘密

【Nコード】

N7653H

【作者名】

K n

【あらすじ】

世界で1、2を争う大財閥の次期後継者西園寺スミレにはある重大な秘密があった。それは。

Act・1 秘密

白いブラウスの上からノースリーブの黒を基調としたシンプルなワンピースで腰に白いエプロンを身に纏った女性、小林 咲は今晚開かれるパーティーの準備をするために愛想のよいニコニコとした笑顔を浮かべ、主人の部屋のドアを叩いた。

コンコン。

咲

「お嬢様、お召しかえますよ。」

よじっ

咲

「お嬢様っ！！？」

しかし、その笑顔は瞬く間に驚きへと変わった。
なぜならば主人が窓から飛び降りようとしていたからである。

呼ばれた本人は気楽そうに舌をだし、アッカンベーとした。

スマレ

「またパーティー（あんな所）なんて退屈！後はよろしくね 咲っ
！」

咲

「そっそんなあ！！」

悲鳴のように言うメイドのことなど関係ないとばかりにスマレはそのまま飛び降りた。

咲

「困りますううう！」

スタン。

軽々と膝をつき着地すると文字通りニンマリとした。

スミレ

「さあーて今日はどこに行こうかなあ」

スミレは立ち上がり膝についた砂を払うと胸の前で両手を絡め、光悦とした笑いを浮かべた。

スミレ

「あのム力つく執事もいないし！最っ高…ッ！」

ポンッ

その時誰かが背後からスミレの肩に手を乗せた。

「楽しそうだなア。」

スミレはまさか！と素早く振り向くと白い半袖のカッターシャツの上に黒のシンプルベストに同じく黒いネクタイとズボンをはいた若い男が立っていた。

スミレは男を見ると顔をしかめた。

スミレ

「ゲッ！！御堂 要っ！！！」

彼こそが今言ったム力つく執事だからだ。

クルリと踵を返して長居は無用とばかりに冷や汗を頬に垂らしながら言った。

スミレ

「じゃあ…私はこれで…」

ガシッ。

にっーこり。

要

「そんな訳ないでしょう？さ、今回も一肌脱いで頂きます。」

要は顔をスマイレの耳元に近づけると気持ち悪い位の笑顔で言った。

スマイレ

「…で、ですよね……」

「西園寺グループは年商数億万ドルの世界で1、2を争う程の大財閥で飛行機からデパートまでその事業は広く」

あの後、大人しく要に連れられいつものように咲にセットをしてもらった。

咲

「さ、もうよろしいですよ」

くしを手に持ちながらスミレを眺め満足そうに言った。

「その次期後継者である私　、西園寺スミレには一族や重役にもしらせていないある秘密がある。」

「それは　……」

咲の言葉を合図に隣の部屋から要が出てきた。

要は縦長の下にコロコロのついた鏡を転がし椅子に座っているスミレの前に設置した。

要

「どうぞお嬢様。いえ、」

鏡には水色のシャツに白のリボンを結び、右袖には西園寺家のエンブレムが施されていて下は黒い短パンをはき、優雅に座った男の子が映っていた。

要

「坊ちゃん。」

「変装して『男』と偽っていること。」

§西園寺家の秘密§

Act・1 秘密

8月21日更新。

Act・2 一族のおきて

ブロロロ……

黒塗りの立派なリムジンが夜の町を走っている。

その車の中で執事が黒い革の手帳を開けスケジュールをスラスラと言っていた。

要

「本日は我社の新しいホテル、エリザベスホテルにてオープニングセレモニーがございます。そして……」

スマレ

「わかってる。『次期後継者らしく振る舞え』つーことだろ？」

またか。と半ばイライラしながら腕を組み言った。

要は満足そうに笑ったがすぐに声色を低くした。

要

「はい。あと、ご存知だとは思いますが……くれぐれも秘密がもれませんように。」

パタン。

手帳を閉める音が静かな車の中に響いた。

窓へと視線を向け少し間をおいてから呆然と言った。

スミレ

「……わかってるさ。そんなヘマはしねエーよ」

キキキー……

目的地に着いたようでは要は素早く降りると車の後ろから回ってスミレのドアを開けるとうやうやしく礼をした。

スミレは優雅に降りると後ろにいる要に口を尖らせて言った。

スミレ

「それがテメーの好きな『一族のおきて』だもんな。だからムカつくんだよ。」

要はそんな嫌味を気にしない様子で嬉しそうにニッコリと笑った。

要

「流石です坊ちゃん。」

パーティー会場には大財閥、西園寺グループが主催者だけあって世界各国の有名人やお金持ちの人がいた。

スタスタ。

その会場の入り口からステージにむかって伸びるレッドカーペットを堂々と歩く少年と執事がいた。

参加者達は彼らを目にとると注目した。

男 A

「オイっ あれって…」

男 B

「ああ！西園寺さんだ！！」

男 A

「女共の目が光ってるなあ」

男 B

「そりゃそうさア！！結婚したら世界を治めたのと同じなんだからなア！！」

パツ。

スマレがステージに立ち壇上の前に立つと待つてました。とばかりに会場が暗くなりステージがライトアップされた。

しん……

そして彼に対しての興味や憧れなどのざわめきも暗くなった瞬間静まり返った。

「西園寺家は昔から男尊女卑思考が高く」

「当主は一族の中で最も優秀でかつある条件を満たした者で」

スマレはにこやかな笑顔と威厳をもってマイクでスピーチをした。

スマレ

「皆様お忙しい中、オープニングセレモニーにお越し下さいまして誠にありがとうございます。本日は……」

「『男』と決まっている。」

約1分半程でスピーチは終了し盛大な拍手が響き渡った。

スマレ

「簡単ですが開会式を終了させていただきます。」

ワーー！！！！
パチパチ！！

疲れたようにステージから降りると要が満足そうに微笑み出迎えた。

スミレ

「ハー、これでいいんだろ要。」

要

「ええ、ご立派でした。」

「西園寺君!!」

二人は声のするほうに顔を向けると色黒の中年のおじさんが立っていた。

スミレ

「…若林さん」

突然呼ばれたので反応が少し遅れてしまった。

彼はある鉄鋼業を主とする中小企業の社長の若林 ひろぶみ 博文。

何代も続く老舗で我社の船や車を作るときにお世話になった会社だ。

がははと笑いながら言った。

若林

「いやぁ少し見ない内に大きくなったなぁ。最近どうだい？ああ、娘を紹介するよ。」

そっついうや否や若林さんの後ろからピンクのドレスを身にまとい、恥ずかしそうに頬を赤らめてきた。

若林

「娘の美和子だ。」

美和子

「あ、あのっ…」

付き合っして下さいませんか？」

突然の告白に二人はポカンとした。

若林

「がははは、これこれ美和子は積極的になっ」

脳内のフリーズがようやく収まり状況が掴めるとスマレは頬には自分の後ろで手を口に添えて必死に笑いを堪えている要に対し怒りマークを、若林さんと美和子さんには苦笑いをした。

スマレ

「か、考えさせていただきます……。」

要

「…くつくつつ」

キヤーー！

美和子さんは嬉しそうに若林さんと何処かに消えて行った。

要はバイキングからスマイレのために取ってきたご飯をスッキリした表情で渡した。

要

「付き合って差し上げたら宜しかったのに。」

女ですけど。」

ニヤ〜と言った。

スマイレ

「五月蠅いッ!!」

フォークをもちながら吠えた。

スマイレ

「人の事バカにしてないで『仕事』は片付いたのか？」

イライラとしながらお皿を受け取り横目で要を見た。

要はふふんと笑顔で言った。

要

「当たり前です。今頃庭で寝てらっしゃいますよ。」

庭には沢山ものマフィアの人が伸びていた。

参加者は皆有名人や業界でも指折りの人達なので日頃から恨みを持っているマフィアや拉致して身代金を要求しようと目論む輩がよく忍び込むのだ。

ちなみに要は西園寺グループ次期後継者の専属執事だけあってやはりただ者ではなかった。

空手や柔道などの格闘技は勿論のこと、剣道やテニスなどのスポーツから料理や裁縫までなんでもこなすいわゆるスーパー執事だ。

そんななんでもこなしてしまう執事をどうも人間味がなくロボットのように感じてしまうのも要を苦手に思う要因だった。

スミレ

「…で、誰だったんだ？」

はむ。と肉を口に入れながら横目で聞いた。

腑に落ちないとでもいうように眉を険しくさせてポツリと言った。
要

「宇水 鏡弥きょうやでした。」

スミレ

「宇水か……！なんだ、不満そうだな」

要

「いえ、…ただあまりにもすぐに解ったので……………」

大阪

和風の豪華な家の軒下に二人の男女が座って空を見上げていた。

芸者の女の子が隣にいる男に不思議そうに聞いた。

女

「月なんか見ておもしろい？」

鏡弥

「なんでや？」

顔はそのまま月を見ながらニヤニヤしながら言った。

女

「だって鏡ちゃん楽しそうなんやもん」

そう言つと身体を鏡弥にもたれかった。

鏡弥

「ああ、楽しいでエーこれからのゲームをかんがえろとなア」

§西園寺家の秘密§

└ Act・2 一族のおきて┐

8月22日更新。

Act・4 一丸 光太

宇水家メイド長の橘 薫は今日から入る新入生桜井 麗に部屋の間取りと仕事の説明をしていた。

薫

「ここが調理室。で、ここが浴槽。…これで全て説明しました。何か質問は？」

薫はキリリと中指で眼鏡をあげると鋭く言った。

スミレ

「……あのう。妙に女性率が高い気がするのですが……」

恐る恐ると手を挙げて先程から気になっていることを聞いた。

おおざっぱに見積もっても女性：男性＝8：2位の割合で働いてい

る。

薫はなんだそんなことですか。とても言うようにちろりと麗を見る
とキツパリと言った。

薫

「坊ちやまの嗜好です。」

麗

「ああ、そうですねか……」

エロ坊ってことか……
あんまり近づかないでおいっ。

呆れたように呟いた。

宇水家当主は女ったらしだ。という噂は聞いていたが使用人までも
女性で固める程だとは……。麗
「……あの何をすれば？」

薫

「そうねえ……」

「じゃあ坊ちゃん、まへ夕食を運んでくれる？その時に挨拶も。」

ピシ……。

漫画ならば石にヒビが入る位だ。固く決意した瞬間に砕け散ってしまっとは……。

麗は恨めしそうに4時間前を思い出した。

東京

スミレ

「要……！何この服は？……！」

要に手渡された服を隣の部屋で着ていたのだがあまりの衝撃に顔を真っ赤にしてドタドタと要の下へ走ったのだ。

スミレが手渡された服はメイド服だった。

丈も膝上でいわゆるミニスカートというものだ。

ヒラヒラヒラリ〜ンという効果音が聞こえてきそうだ。

要

「あれ？嫌ですか？」

似合ってるのに。

裾を必死で押さえて怒っているお嬢様にキョトンと見つめた。

スミレ

「当たり前よ！！」

機嫌をなかなか治さないお嬢様に要はフーとため息をつくと言った。

ように今回の作戦を言った。

要

「宇水 鏡弥の他に黒幕がいる可能性がありますので、まずはその黒幕を探るために潜入捜査をしてもらおうと。」

スミレ

「潜入捜査？」

要

「はい。宇水 鏡弥を嫌っている者もしくは我々に対立させたいと願っている者の犯行という線が強いので…」

それともお嬢様には荷が重過ぎましたか？」

これが決定的だった。

意地悪そうに笑った執事にキツと睨むと口をヒクヒクさせて呟いた。

スミレ

「……私を誰だと思っているの？」

西園寺　スミレよッ！！」

要は内心ほくそ笑みながらニコリと言った。

要

「流石です。」

扱いやすい。

大阪

麗

「……と、意気込むのはいいけど……誰は黒幕なんだろう。」

麗ことスミレはため息をつきながら食堂から受け取った主人の夜ご飯を運んでいた。

ご飯も屋敷と同じく日本料理で沢山の小さな小皿に様々なおかずが入っている。

スッ。

うーんと考えに集中していたため背後に来た人に気がつかなかった。

「黒幕って？」

麗

「それはー……！」

宇水 鏡弥！！

笑いながら振り向くと背後にいたのは紺色の着物を着て右側はスッキリしていて左側は盛っているような黒髪の男だった。

鏡弥は目を細めてニコニコと話した。

鏡弥

「君が新しく来たメイドやなあ」

鏡弥は両手を着物の裾に入れ、ジーツと麗を見つめるとズイツと詰め寄った。

鏡弥

「君 ……」

麗は冷や汗を浮かべたじたと下がった。

麗（バ、バレた?!）

しかしそんな心配いらなかったみたいだ。

ガシッ!!

突然麗の手を包むように掴むとニコニコと嬉しそうに言った。

鏡弥

「ワイの彼女になれ!」

麗（ハアーー?!!……）

麗は思いもよらない告白に驚愕したがすぐに手を払うと鏡弥に捕ま
れた手を服で拭いた。

グイッ！

デレデレしている鏡弥の耳を誰かが勢いよく引っ張った。

「コラ！坊ちゃん！！」

鏡弥

「いッ！」

鏡弥は突然の痛みに声にならない叫び声を出した。

「目を離すとすぐこうなんですから！！」

白のカッターシャツに黒の長袖のスーツをきてネクタイは青色で焦げ茶色のフワフワとした頭で眼鏡をかけた男が困ったように怒っていた。

鏡弥

「光太！！！！」

男を確認すると涙目で驚いたように言った。

麗

「…えっと

…」

状況がイマイチ飲み込めていない麗は言い争っている二人を手持ちぶたさに見た。

その視線に気づいた鏡弥はニパツと笑うと隣にいる男を指差して言った。

鏡弥

「ああ、コイツはワイの執事の一丸 光太こうたって言うん」

紹介された一丸は麗に気づくとキビキビと謝った。

一丸

「一丸だ。鏡が迷惑をかけた。」

麗

「い、いえ!」

そんな一丸の真面目な態度に思わずどもってしまった。

一丸
「！」

一丸は一瞬何かに気づいたようにピクリと目を見張った。

麗
「？」

なんだろう？
今晚まれた……？

一丸
「じゃ、鏡行くぞ！先生が待ってる。」

しかし何事もなかったように鏡弥の着物の衿を掴むと引きずって行った。

鏡弥
「ほななあゝワイの天使ゝ」

ブンブンと両手を振りながら引きずられていく鏡弥に苦笑いをしながら曖昧に手を振った麗だった。麗（天使…）

ゾクゾクと悪寒がして顔をしかめたのだった。

§西園寺家の秘密§

く Act . 4 一丸光太く

8月24日更新

Act・5 密会

次の日の早朝。

キュキュ。

麗は欠伸をしながら窓を拭いた。

麗

「ふあああゝ……」

……眠い。

いつも7時ちょうどに要に起こしてもらっているのに、今現在5時。昨日までの自分はまだ布団の中なのに……と恨ましげに窓を強く拭いた。

麗

「ここは寺か、つつーの！」

そんな愚痴をこぼしていたら肩を棒のような物で叩かれた。

バシンッ！！

麗

「キャッ！」

驚いたように振り向くとそこには目を吊り上げ靴べらを持ったメイド長だった。

薫

「そのだらし無い格好は何ですか！」

スミレ

「すみません」

服を着るにしても今まで咲にやつてもらっていて自分で服を着たことないのでこのようになりましたなんて一介のメイド役をしている今言える訳もなく、大人しく謝った。

薫

「全く、貴方一体いくつなのッ?！」

服も着れないなんて幼稚園児以下ねッ!!

そう罵倒しながら麗のメイド服の腰周りのリボンを引っ張った。

グイッ!

麗

「うつ...!!」

宇水家のメイド服はコルセットみたいな造りになっているため、麗は苦しそうに息を吐いた。

薫

「さ、これでいいわ。ここはもう終わって中庭の整備をして。」

満足そうに頷くとキビキビと仕事を告げ、足早にどこかに行っていた。

麗は薫がいなくなった事を確認すると持っていた雑巾をバケツへ叩き入れ、薫が去った方にアツカンベーをして皮肉たつぷりに言った。

バシン！

麗

「はーいッ！只今！！」

中庭

屋敷は上空から見ると綺麗な正方形となっており正方形の中部分は全て中庭となっている。

そのため中庭はとても広く、掃除するのに骨が折れるため使用人はみなここの掃除を『地獄の掃除』と呼んでいる。

よって、たいてい新人が担当したり罰としてさせられたりする。

麗もまたしかり。

麗

「これを一人でやる、と？」

マジですか……

ぐると庭を見渡すとげっそりと言った。

麗

「なんで、私が、こんな目にッ!!」

なぐんて愚痴をこぼしながらも後の説教が怖いので従順に従うお嬢様なのでした。

それから二時間後。

麗は誇らしげに手を腰にあて満足そうに綺麗になった中庭を見渡した。

麗

「さすが私!」

しかし、まだ半分。

それを思い出しヘナと地に崩れ落ちた。

麗

「もう無理ッ…」

「お。ワイの天使！」

……まさか、この声は

麗は嫌そうに声した方を見た。

予想的中。

そこには廊下から嬉しそうに見下ろしている宇水家当主の姿があった。

麗（この疲れてる時に〜！怒）

鏡弥

「早速『地獄の掃除』に当たってしもたんや」

笑いながら中庭に下り近づいてきた。

麗

「その愛称知ってるなら埋め立てるなりなんなりして下さい」
よっこらせつと立ち上がると恨めしそうに言った。

鏡弥

「埋め立てる、か。それはできやんわ」

腕を着物の袖の中に入れ、困ったように笑った。

麗

「どうして？」

不思議そうにキョトンと鏡弥を見つめた。

鏡弥

「死んだ親父がいっちゃん一番好きやった場所やでな……」

懐かしそうに目を細めて中庭を見た。

父親のことを思い出しているのだろう。

麗

「……………父親。」

何故そこまで愛おしそうに言えるのだろうか。

解らないし、
解りたくもない。

麗はポツリと呟いた。

鏡弥

「……………麗？」

急に静かになったから心配したのか鏡弥が不安そうに麗の顔を覗いた。

ハッ！

麗

「……近いッ！それに何呼び捨てにしてんのよッ！！」

麗は目の前にあった鏡弥の顔を殴ると絶叫した。

「

」

麗

「！」

ドゴォ！！

鏡弥

「痛……、酷

「シッ！！」

鏡弥は殴られた頬をさすりながら辛そうに言ったが険しい顔をした麗に遮られた。

さっきまでとは明らかに異なる表情に鏡弥も真剣な面持ちで言った。

鏡弥

「どうしたんや？」

麗

「……誰かいる。」

場所を特定するために自然と小さく短くなる声。

麗は微かな声を頼りにおもむろに声のするほうに歩き出した。

鏡弥

「お、おい！」

……なんなんや、
この娘？

普通の人には分からんやろうけど、闇の世界に足を踏み入れた人なら分かる。

あれは『裏世界』で生きとる人の顔や。

鏡弥はスクツと立ち上がると麗の後を追った。

麗を見つけるのに手間はかからなかった。

麗は木々に隠れるようにしてさっきの場所からそう離れてない所で『何か』を盗み見ていた。

鏡弥は忍び寄るようにして麗の隣に近づくと『何か』を見た。

鏡弥
「！」

そこにいたのは一丸とリーゼント頭で頬にキズがあり白のノースリーブを着て黒のドカンをはいた男だった。

鏡弥

「光太?!…と誰や?」

思いもかけない人物で動転しながらも、見たことない人を不思議そうに聞いた。

麗

「あれは…ラガー・オルゾット。フリーの殺し屋で標的を愛用のナイフでメッタ斬りすることから通称『シュレッター・ラガー』と呼ばれているわ。」

二人の会話に意識を集中させているからか淡々と説明する麗。

一丸

「準備はどうだ?」

腕を組み木にもたれながら尋ねた。

ラガー

「OKだぜ。コイツも早く吸いたいつて騒いでてなア」

ナイフの切断面を楽しそうになぜながらウズウズと答えた。

一丸

「まあ、待て。スタート実行は19時だ。それまでは大人しくしている。」

ラガー

「解ってるさ。今日であの大財閥、西園寺家が無くなるなんて誰が考えただろうなア!!」

ゲラゲラと可笑いそうに腹を抱えて笑った。

一丸

「ああ、その前に。」

思い出したかのように言つと指を鳴らした。

パチン!

一丸

「そこに居るのは解ってる。出てこい!!」

ドキン!

麗 「！」
鏡弥 「！」

一丸

「今までお世話になった坊ちゃんにご挨拶をしないとな」

ニヤァーと黒い笑みを浮かべ言った。

§西園寺家の秘密§
└ Act・5 密会 ┘
8月25日更新

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7653h/>

西園寺家の秘密

2010年10月9日00時21分発行